

イエスを裏切るユダ

ヨハネの福音書 13 章 21-30 節

はじめに

ヨハネの福音書 13 章は、イエス様が十字架で死なれる前夜の「最後の晩餐」の出来事が書かれています。そこでまずイエス様は、弟子たちの足を洗い、彼らへの愛を示されたのです。それに続いてイエス様は、今日の聖書箇所にあるように、弟子の一人がご自分を裏切ることを打ち明けられるのです。

1. 弟子の一人の裏切りを打ち明けられるイエス

21 節には、こうあります。「**まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人が、わたしを裏切ります**」。イエス様は、このことを打ち明けられる時、「**心が騒いだ**」とあります。この「心が騒ぐ」という言葉は、11 章にも出てきました。イエス様が愛されたラザロが病気で死に、ラザロの姉妹が泣いている時、イエス様は霊の憤りを覚え、「**心を騒がせた**」(ヨハネ 11:33)のです。そしてその後、イエス様は「**涙を流された**」(ヨハネ 11:35)のです。今日の聖書箇所でも、イエス様は、涙を流すような悲しみを覚えながら「心を騒がせた」のではないかと思います。弟子の一人が自分を裏切る、そこには大きな悲しみがあったと思うのです。

22 節には、この言葉を聞いた弟子たちの反応が書かれています。「**弟子たちは、だれのことを言われたのか分からず当惑し、互いに顔を見合わせていた**」。弟子たちは、誰がイエス様を裏切るのか分からなかったのです。イエス様を裏切るのは、26 節にあるように、「**イスカリオテのユダ**」です。すでに 13:2 に、「**悪魔はすでにシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうという思いを入れていた**」とありましたので、私たちは、イエス様を裏切るのは、イスカリオテのユダだとすぐに分かります。しかし、この時の弟子たちは、誰のことを言われたのか全く分からなかったのです。イスカリオテのユダという人は、いかにも裏切りそうな人というのではなかったのです。危なっかしい人、問題の多い人というのではなかったのです。むしろ、29 節にあるように、ユダは「**金入れを持っていた**」のです。つまり会計係だったのです。会計係は、必要な物を買ったり、貧しい人々に施しをしたりする人です。お金を任されるのですから、人一倍、信頼の厚い人だったのだと思います。まさかユダが裏切るなんて！ユダが裏切るなんて信じられない！そう思われるような人だったのではないかと思います。

2. イエスが愛しておられた弟子

そこでペテロは、イエス様を裏切るのは誰なのかを知ろうとして、イエス様の胸のところで横になっていた弟子に合図を送って、イエス様からそれを聞き出そうとします。23節にあるように、イエス様の胸のところで横になっていた弟子というのは、「**イエスが愛された弟子**」でした。名前は書かれていません。この後も、この「イエスが愛された弟子」というのは、度々出てきますが、この「イエスが愛された弟子」というのは、古代からの伝説では、この「ヨハネの福音書」を書いた「ヨハネ」ではないかと考えられてきました。ヨハネは、自分が書いた福音書に、あえて自分の名前を出さずに、「イエスが愛された弟子」と書いたのかもしれませんが。また聖書の中では、ペテロとヨハネがペアで登場することが多いので、ペテロが合図を送ったのは、ヨハネではないかと考えられています。

それにしても、ヨハネがイエス様の「胸のところで横になっていた」というのは、変な光景です。これは、当時の食事のスタイルを知らないとう理解できないことです。当時のユダヤ人は、椅子に座って食事をするのではなく、横に寝そべって、左ひじをついて、右手で食事をするというのが一般的であったようです。ですから23節の「横になっていた」というのは、欄外脚注にあるように「食事の席についていた」という意味なのです。他の聖書では、「イエスの胸のところで横になっていた」という部分は、「イエスの右側で席に着いていた」と訳されています。つまりヨハネは、イエス様の右隣で、横になって食事をしていたのです。そのため、自分の頭がちょうど同じように隣で横になっているイエス様の胸のあたりにあったということだと思ふのです。

この食事の席の中心は、もちろんイエス様ですが、ユダヤではその左側が第一の席で、右側が第二の席だったようです。つまりヨハネは、第二の席に着いていたのです。では、第一の席には誰が着いていたのでしょうか。普通に考えると、ペテロが着いていたのではと思われますが、学者たちはそうは考えません。ペテロは、ヨハネに合図をして、イエス様から聞き出そうとしているのです。もしペテロがイエス様の右側にいたのだとしたら、わざわざヨハネに合図をするのではなく、直接イエス様に聞けばよかったのです。ですから、ペテロはイエス様から離れた席に着いていたと考えられます。では、第一の席であるイエス様の右側には誰が座っていたのでしょうか。イエス様はヨハネに、「**主よ、それはだれのことですか**」と聞かれると、「**わたしがパン切れを浸して与える者が、その人です**」と言われて、ユダにその浸したパン切れを与えられるのです。ユダは、イエス様から浸したパン切れをすぐ受け取れる距離にいたのです。つまりユダは、イエス様の隣にいたのです。ですから多くの学者たちは、イエス様の右側である第一の席には、ユダが着いていたと考えるのです。私たちは、ペテロこそイエス様の一番弟子だと考えますが、実は会計係であるユダが、イエス様の一番弟子であった可能性もあると思ふのです。もしユダが、本当にイエス様の右側である第一の席に着いていたのだとしたら、ユダは決して弟子たちの中で影の薄い暗い顔をした人物であったのではないのかもしれませんが。むしろ弟子たちの中でも、イエス様からも弟子たちからも信頼される人物であったのかもしれませんが。

3. ユダへのイエスの愛

しかし、ユダはイエス様を裏切りました。「裏切り」というのは、愛があったからこそ「裏切り」なのです。イエス様がもともとユダは裏切るからと邪険に扱い、その結果、ユダがイエス様から離れていったのなら、「裏切り」でも何でもないのです。イエス様がユダを深く愛していたからこそ、ユダの行動は「裏切り」なのです。そもそも、食事の席でイエス様の右側である第一の席に座らせていたこと自体が、イエス様の愛と信頼の現れなのです。

イエス様は、パン切れを浸して、ユダに与えられました。このパン切れを浸して与えるという行為は、当時のユダヤでは、客に対する最高級のもてなしを表す行為であったと言われます。例えば、旧約聖書のルツ記には、ルツとボアズという後に夫婦となる男女が出てきますが、ボアズはある時、ルツに「ここに来て、このパンを食べ、あなたのパン切れを酢に浸しなさい」と言って、ルツに浸したパン切れを与えました（ルツ記 2：14）。これは、客のもてなしを表す行為であると同時に、愛を表す行為でした。つまり、浸したパン切れを与えるというのは、「あなたを愛している」というメッセージが込められた行為なのです。イエス様は、最後の最後までユダに愛を示されたのです。

さらに言えば、イエス様は最後まで、「わたしを裏切るのはユダである」とはっきり言われませんでした。あくまでも「あなたがたのうちの一人が」と言われたのです。そのため、弟子たちはなぜ、ユダがパン切れを受け取った後、すぐに出て行ったのかが分からなかったのです。おそらくイエス様とヨハネの会話は、小声での二人だけの会話であったと思います。ですから、ヨハネ以外の弟子たちは、最後まで誰がイエス様を裏切るのか分からなかったと思います。それはイエス様の、ユダに対する愛の配慮であったと思います。

おわりに

ユダは、イエス様からパン切れを受け取ると、すぐに出て行きました。30節を見ると、「時は夜であった」とあります。これまで、この「最後の晩餐」は「夕食」であると、何度も書かれていましたから、「夜」であるのは分かり切ったことでした。しかし、あえてここには、「時は夜であった」と書かれています。それは、ユダが夜の暗闇に消えていったことを表すためであったと思います。「わたしは世の光です」(ヨハネ 8：12)と言われたイエス様のもとから離れていくことは、暗闇の中で生きていくことを意味するのです。

今日の聖書箇所は、イエス様を裏切るユダとイエス様に愛された弟子であるヨハネが対照的に描かれています。イエス様は、ヨハネを愛され、ユダを愛されなかったのではありません。イエス様は、ユダのことを最後まで愛されたのです。しかしユダは、光であるイエス様の愛の御手を振り払って、自らサタンに身を預け、暗闇の中に消えていったのです。イエス様に愛されていたからこそ、ユダの行為は「裏切り」なのです。

私たちも、イエス様に愛されています。イエス様の愛は、私たちの罪の償いのために、十字架でいのちを捨ててくださった、その出来事に現わされています。私たちは、ユダの

ように、イエス様の愛の御手を振り払って、自ら暗闇の中で生きていくのか、それともヨハネのように、イエス様の愛の中で、その胸元に寄りかかって生きていくのか、その選択が迫られているのです。

古代の神学者であるオリゲネスという人が、こんなことを言いました。「福音書は、あらゆる聖書のうちで随一の果実である。ヨハネの福音書は、福音書のうちでも随一のものであって、これは、自らイエスの御腕に寄りかかったことのない人には、意味が理解できない」。聖書やキリスト教、そして神様やイエス様という方は、いくら勉強しても分からないものです。大切なのは、ヨハネのように、イエス様の胸元に寄りかかることです。思い切って、イエス様の胸に飛び込んでみることです。イエス様の胸に飛び込んだ時に、初めてイエス様の愛が分かってくるのです。胸に飛び込むというのは、信頼の証しです。人の胸に飛び込むのが上手なのは、子どもたちです。子どもようになって、イエス様の胸に飛び込んで行く、それがキリスト教の信仰というものではないでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

ユダは決して特別悪い人間ではなかったのかもしれませんが。イエス様から、また弟子たちからも信頼され、愛されていた弟子であったのかもしれませんが。しかしサタンの誘惑により、光であるイエス様のもとから暗闇の中へと消えていきました。

私たちもイエス様から愛されている者たちです。十字架で裂かれた肉と流された血が、そのことの証です。しかし私たちもまた、危うい存在、弱さを持った存在です。「裏切り」と隣り合わせの存在です。どうか、絶えず、ヨハネのように、イエス様の胸の中に寄りかかって生きることが出来ますように。ヨハネのように、生涯の最後までイエス様の愛の中で生きることが出来ますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によって祈りします。アーメン。